

新しい歴史の始まり

美津子

たくさんのふしぎを通して風の教会が姿を現わしました。「ふしぎ」と言うなら、21年前の「白いハト」は最大のふしぎです。

今朝カレンダーを眺めながら、明日は建設会社からの引き渡し、12月3日の白いハト記念日は竣工式、12月14日はオープニング礼拝だよな……と思っていると、12月3日が水曜日であることに気がつきました。

あ、21年前と同じ水曜日だ。これまで20回の12月3日を迎えてきましたが、今年21回目が再び水曜に当たっています。何年か前に一度、こんなことがありましたが、その時もなぜかうれしかったものです。風の教会ができる年にそのようになるのも、ただの偶然ではないのかもしれないですね。

つい2、3日前、スタッフが風の教会の年表を作るために、確認したいと言ったので、私はこれまでの「ぶどうの木」を開きました。その時、まず目に飛び込んできたのが、ピーター先生の「白いハトが風の教会となる」(2007年1、2月号)という一文でした。

「白いハト」が風の教会となって姿を現わすとは、神が「白いハト」に託された願いが、風の教会という姿になって見えるものとなる。神の願いが風の教会に成る、ということでしょう。風の教会そのものとなるということです(これは建物そのもののことではなく、風の教会に呼ばれた人々を通し、願いが成るということで、呼ばれた人々の内に風の教会が建つということです)。風の教会の竣工式を目前にして、この文を見つけたのもただの偶然ではない気がしました。

「白いハト」のあとから、私は主に祈ると主が語って下さるということを知るようになりました。思いとして、時には耳にも聞こえる「声」として答えて下さることを知りました。21年前、初めて聞いた「白いハト、白いハト……」という言葉も、ひびいて来た「声」でした。身体の内側から、いや、空からもひびいて来ました。そんな「声」があるということなど、全く知らない時でしたから、心底びっくり仰天でした。人などいないのに聞こえる「声」なんて、小説や伝説の中の話としか思っていませんでした。ましてや自分に起こることなど想像すらしたことがなかった。しかし、それによって私の人生は一変してしまいました。キリストとの出会いだったからです。

白いハトが、キリストとの出会いであることを本当に分かるまで、時間がかかりました。私にとってキリストが神であることを知ったのは、白いハトからちょうど3ヶ月。それがすべての人の救いであると知るのには、一年近くかかったと思います(私が無理して信じようとしなくても、神は最も分かりやすい方法で、一つ一つのステップを踏むように教えて下さいました。「導き」という言葉を知ったのもこの時でした)。

その間、私は何度も「わたしは待っている」と神が語っておられる(と感じる)「声」を聞いてきました。

たしかに、私は何も知らない、分かっていない者でした。教会へ通っていたわけでもなく、聖書も英文学に必要なだけ、ごく一部を読んでいただけです。

白いハトがキリストとの出会いであったことを知り、キリストが、私一人の神ではなく、創られたすべてのものの神であることを知ってほしいと神は待って下さったのだと思いました。キリストがすべてのものの神であることを知ったのは、大きなよろこびだったからです。しかし「声」は、まだ「わたしは待っている」でした。何度「何を待っていて下さるのですか」と問うたことでしょうか。しかしこの問いばかりはいつもノーアンサーでした(ノーアンサーが答えなのだと受取っていました)。

信仰へ、与えられていることをよろこぶ信仰から、与えられなくても信じる信仰へと目が開かれたのが、5年後(1992年)のブラックホール事件でした。私の信仰を揺るがした大事件でしたが、この時でも「わたしは待っている」でした。主はまだ何を待って下さっているのでしょうか。

1992年、私たちは静岡でリトリート(2泊3日の主の前に静まる時)をもちました。これが子羊の群れの第1回リトリートでした。私はさんびの美しさに感動し、一日中さんびできるよろこびを知って、思わず主に祈りました。御殿場の美しい緑の芝の上で夜、空に向かって祈った祈りでした。

主よわが心は定まりました

これは主の願いにだけ生きたいという私の心の叫びでもありました。自分の魂の深い喜びに目覚めた時でもあります。しかし主の「声」はこの時も「わたしは待っている」でした。

その翌年(1993年11月)、芦屋会堂ができました(今年は15周年です)。オープニング礼拝の中「さんびですべては完成する」と語られ、私たちのさんびの信仰の歩みが明らかにされました。芦屋会堂ができたことは、この上ないよろこびでした。これを通して、どんなに多くの人が主のもとに帰ってこられたことでしょう。しかし「わたしは待っている」でした。

阪神大震災(1995年1月17日)では命拾われ、私は残る生涯、主の願いにだけ生きる決断をしました。もはや「生きたい」ではなく、「生きる」という決断でした。ガラス棚のガラスがたてに割れて刀の刃状態になって何十本と(いや何百本に近い気分でした)真下の掛ふとんにさざりました。ふとんを貫く刺さり方でしたが、私は無傷でした。しかし天井までびっしりと、しかも二重になって入っていた何百冊もの本や教材が、本棚や家具と共に私の上に落ちてきて、私は窒息死寸前までいきました。

助け出された時の「第一声」は「野の花を見よ」でした。まるで「死んでもわたしだけを見るか」と語られているかのようでした。でもその通りだったのです。私は、野の花に限りない神の愛を見てしまいました。私が生き残されたのは、この神の愛を伝えるためだけであると腹を決める時となりました。ブラックホール事件に次いで、私は自分が新しくされたのを自覚しました。

ところが「わたしは待っている」でした。

主のいやしは毎月のように起こっていました。腹を決めるごとに主のいやしは激しさを増し、主を信じる人も信じ難いほど増えていきました。個人的に手を置いて祈る祈りだけではなく、礼拝の中で全員に向かって祈るいやしの祈りでも、多くの人が「いやされた」という証をして下さるようになってきました。

私はふと思いました。もうたくさんの人に出会い、たくさんのはいやされ、たくさんの人が主を信じた。(会堂ができる前、私は集会で出会った人々にはノートに記名してもらっていました。初めて主を受け入れる祈りをされた方には◎をつけ、いつもそのノートを持ち歩いて祈っていました。◎の人が700を越えた頃、もうノートが間に合わなくてノート記名をやめてしまいました。芦屋教会ができて、主を信じる祈りをする人の数が増え、洗礼者が月に100名を越えるようになっていました)。

もう充分主の仕事をしてきたと思う。もう待ってもらわないですむようになったはずだ。

しかし「声」は「わたしは待っている」でした。

2000年に入って(忘れもしない震災記念日でした)、私の口からポンとけしの花が開くような感じで、さんびが飛び出してきました。その最初に与えられたのが、「聖なるかな、アレルヤ」(後に「聖なるかな」にタイトルが変わりました)のメロディでした。

その後すぐに、すべての物には「ひびき」があり、それに心を合わせるとさんび曲になることが分かりました。中でも、聖書には最も美しいひびきがあります。花や草、聖書の詩篇、新約のイエス様の言葉などから次々にさんびが与えられるようになりました。この時ばかりは思いました。かつて「さんびですべてが完成する」と言われたのだから、主はこのさんびを待っておられたんだ。長い間待ってもらったけれど、これだったんだ。さんびだったんだ！

待ってもらっているわけが分かったと、心からよろこびました。ところが返ってきた「声」は、「まだ始まって

もないと思いなさい」だったのです。

何ということか。私は分からなくなりました。いや分かったのです。主は永遠に待ち続けて下さる神なんだと。

主を信じる者をいつもいつも待ち、成長を見守って下さる。それが主だ。待つて下さる神とは何という愛だろうと、自分勝手に感動すらしたほどでした。

待たれることはよろこびですよ。神が本気で私を愛して下さっていることを知っているのですから。ついですが、つい最近(2008年11月9日)ある働き人のそばに座った私は「声」を聞きました。

おまえは「待たれることはよろこびだ」と言うが
待つこともよろこびなのだよ

主が待つて下さることは知っていますが、自分勝手な、わがままな人間が相手です。神の愛は忍耐でしかないと思っていた私は驚き、あきれて言いました。

あなたを裏切りあなたとの約束すら忘れてしまう者を待つことがよろこびですか
すると、

お前は「待つ」ということが どういうことか分かっていないね
待つとは 信じるということなのだよ

2000年の話に戻りますが、さんびにさえ、「まだ始まってもない」と言われ、私の(私たちの)信仰の成長を待つて下さるのが主だと思った私は、待たれていることはよろこびであるという以上には、考えないようにしました。答えはないと思ったからです。

ところが、2003年9月、信じ難い「声」を聞きました。

やっと始まったね

「やっと始まったね」とは、風の教会の建設計画が始まった時のことでした。主は20年もかけて待ち続けて下さっていたのだと知りました。主に待たれていた「風の教会」です。立礎式(起工式)の時に語られた言葉を思い出します。昨年(2007年)の12月3日、白いハト20周年記念日のことです。

立礎は地を割り 空気を割り 時を割る
新しい歴史の始まりである

そして、「やっと始まったね」から、なんと5年後、2008年8月10日、答えが来ました。私の歴史にとって画期的な「声」が来たのです。これまで「わたしは待っている」と言われ続け、私が「何を待つて下さっているのですか」といくら問うてもノーアンサーで、ついにはもう問うことをやめてしまっていたのですが、答えが来ました。

わたしは待つていたんだよ
天にいるものが地のものと共に礼拝することを
そのような礼拝のできる場所を待ち
礼拝できる時を待つていたんだよ

神は風の教会を待つておられたのですね。

白いハト21周年記念日(2008年12月3日)は、風の教会の竣工式です。

風の教会はわたしの名のために 建てる宮である
わたしの名を伝え わたしの名を残すものである
わたしのよろこびである
わたしの心はここにある

(2006年12月8日 日本設計との契約を結んだ日に)

神の願いが風の教会を通して成るといふ、新しい歴史が始まったのですね。新しい歴史とは、新しい時。新しい時とは、新しい礼拝の新しいよろこびの時です。

私たちは今年のリトリートの直前に「大きなよろこびを見るであろう」と語られていました。リトリートでは天の者が地の者と共にする新しい礼拝が語られ、主が言われる「大きなよろこび」とは、この新しい礼拝のことだと思いました。

「大きなよろこび」なんて、まるで御子のお誕生のようです。風の教会は御子のお誕生に匹敵するほどのことなのかもしれませんね。

イザヤの言葉がひびき続けています。

見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。
わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる。(イザヤ 43:19)

PS

私たちは毎年、「今年は『〇〇の年』」という、年の名を祈り求めます。今年は「天の礼拝の年」でした。風の教会の礼拝が本格的に始まる2009年は「新しい礼拝の年」だと私は頭で考えました。

「天の礼拝」に続いてこれからは「礼拝の年」が続くと思っていました。しかし、来年は「大きなよろこびの年」だと語られている気がします。

つい2、3日前、一人のスタッフがふと一言、言いました。

「来年は大きなよろこびの年になるね」

私はドキリとしました。これはまだ発表していないし、ピーター先生にもお話していない時です。誰もこのことについて口にした者はいません。もし誰かが言えばそれが公表する時だと決めていました。

やはり「大きなよろこびの年」なのですね(もっとも本人は来年の「年の名」を言ったつもりはないのですが)。

風の教会は主のよろこび。大きなよろこびです。

大きなよろこびの年に、主の願いが成りますようにと祈ります。

2008年11月24日

(「ぶどうの木 2008年12月号」より)